

中部の

# エネルギーを 築いた

# 人々

『小山水力電気』を著し理論と実務を实践した  
矢作川水力常務 小山柳一

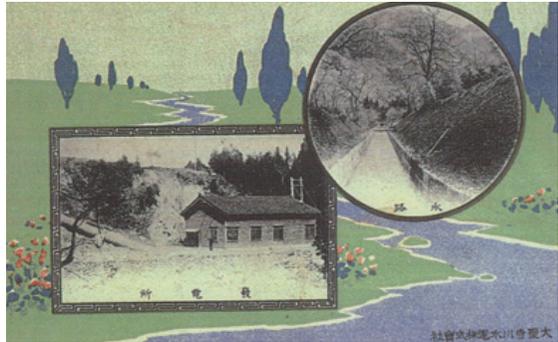
小山柳一は、矢作水力技師長として同社水力事業の発展に貢献し、晩年は中部配電の理事・取締役を務めた技術者である。学究肌の小山は水力電気に関する実務書『小山水力電気』を著し、理論と実務の2つを实践した。小山は、明治19年1月、小山保之助の長男として、信州小諸に生まれた。日本中学を経て、親類が岡山にいた関係から第六高等学校に進み、京都帝国大学工科大学電気工学科に進んだ。



小山柳一

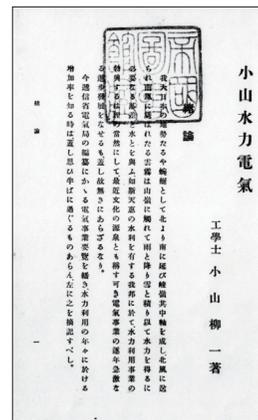
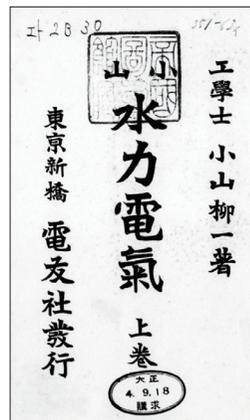
## 大聖寺川水電での水力事業と『小山水力電気』の執筆

明治43年に京都大学を卒業後、石川県の大聖寺川水電に入社し、主任技師として創立から事業が軌道に乗るまで一切を担当した。大聖寺川水電は、近世から日本海航路で活躍した北前船の海運業者等が中心になって明治44年2月に設立した会社(社長久保彦兵衛)で、大聖寺川から分流する紙谷用水を利用して山中発電所(264kW)を建設し、明治44年12月に開業した。



大聖寺川水電 山中発電所(出典『北陸地方電気事業百年史』)

小山は業務の傍ら、『小山水力電気』(上中下3巻、電友社)の執筆を始め、大正4年9月に上巻を完成した。水量、落差の測定法、水力出願手続など水力技術や経営実務を取り上げ、「水力電気に関する一大宝典、最良の師友」として技術者、実務者から歓迎された。詩歌に造詣のある小山は、前書きに、「心せよ谷間かくれの流れにも国のたからぞふくまれにける」と詠み、同書を京都大学時代の恩師難波正教授、青柳栄司教授に捧げている。



小山柳一『小山水力電気』

## 名古屋電灯で串原仮発電所を建設

大正5年、名古屋電灯に入社、同年2月設置された臨時建設部に配属される。電気課長は後に北海道電力社長になる藤波収であった。臨時建設部は、名古屋電灯の新規地点を担当する戦略的な部門であり、部長は社長福沢桃介が兼務していた。入社した小山に命じられたのは、串原仮発電所の建設。第1次大戦ブームで電力需要が急増する中、串原本発電所の完成を待てず、長良川発電所の予備機を流用し、水路の中間に臨時の発電所(2000kW)を設けたもので、大

正6年9月に着工し翌7年6月に完成、電力危機克服の一助となった。



串原仮発電所

## 矢作水力技師長・関連会社の経営

大正8年3月に矢作水力が創設されると、同社技師長に就任した。同社は矢作川筋に発電所7箇所を建設し、近隣の電気会社や大口工場主体に供給した電力卸売会社である。小山は同社最初の発電所、下村発電所(4200kW)の機械設備の設計を担当している。大正14年4月には取締役役に、昭和8年10月に常務取締役役に就任し、昭和17年に中部配電に合併されるまで、同社電気部門の総括者として活躍した。下村発電所堰堤近くに立てられた矢作水力記功碑には技師長として小山

の名前が記されている。社外からは温厚な人物とされていたが、社内では戦国時代の武将の趣があったという。大正13年には欧米へ海外出張を行っている。



矢作水力 下村発電所



矢作水力発電所記功碑

小山は、矢作水力の仕事のほか、南信電力取締役、矢作索道監査役など、関連会社の経営にも関与した。大正12年5月に設立された南信電力は、天竜川支流の阿智川に、立石発電所(現三穂発電所、6000kW)の建設を進め、昭和5年3月に完成したが、昭和2年10月、矢作水力と合併したので、矢作水力最初の天竜川筋の発電所となった。



矢作水力 立石(駒場)発電所

昭和11年7月に、東邦電力はじめ中部地域の電力会社7社により中部共同火力が設立(社長:松永安左工門)され、小山は常務取締役就任する。当時「築港の三本煙突」と呼ばれ、名古屋港に東洋一の規模を誇る名港火力発電所を昭和14年4月に運転開始させ、戦時中および戦後初期、中部地区の最重要電源の一つとなった。



中部共同火力 名港発電所

## 中部配電理事・取締役

第2次電力国家管理で昭和17年4月に中部配電が設立され、矢作水力は解散した。小山は中部配電の理事(昭和21年取締役に改称)に就任する。矢作水力の幹部の多くが日本発送電に移るなか(矢作水力出身の大西英一は後に日本発送電総裁になる)、小山は中部配電に移り、名古屋にとどまった。戦時下の配電業務に邁進したが、昭和21年11月辞任して郷里にもどり、昭和23年6月、62歳で逝去している。趣味は旅行と俳句。「宇治橋に風吹き渡り初詣」「雪どけや徳川邸の大玄関」などの句がある。

(浅野 伸一)



中部配電本社